

建築主：A氏
 設計：吉野弘建築設計事務所
 施工：株式会社ケイテイエス
 所在地：鴨川市

〈介護〉が生んだ住宅建築の創造性

鴨川の家



アプローチから見る外観 海を望む自然豊かな傾斜地に計画され、母屋と離れの2棟からなる

夫を妻が介護する高齢夫婦のための平屋の家と2階建ての離れの2棟からなる住宅である。離れには現在、訪問介護の仕事をしている息子が一人で住んでいる。介護現場をよく知る息子と設計者の幸せな共創の結晶である。

介護の利便性を高めようとすると、廊下幅や手すりの位置など、デザインの制約要件が増えるとはしばしば思われている。しかし、この家では、介護からくる要請がデザインを引き出している。例えば、寝室にトイレ・浴室が斜めに取り付いている。このほうが、車椅子の方向転換がコンパクトでスムーズだからである。症状が進むにしたがって、寝室で過ごす時間が長くなるのを見越して、朝日の感じられる南東に面する寝室となっている。田んぼの四季が寝室からもリビングからも手に取るようにわかる。介護を必要とする人の状態によって、手すりが必要な位置も変わっていく。いずれは夫婦同室がしんどくなる。想定外の事態にも適応して、変わり続けられる家が、究極のバリアフリーということか。

母屋で水平の動きある空間が介護の必然から生まれているのに対して、2階建ての小さな離れはずっと延びた階段が垂直方向の空間を意識させる好対照をなしている。

外壁には、恣意性を超えたランダムな表情がゆっくり風

化していくことへのこだわりが強い。穏やかに古い、風格を増してエンディングを迎えたいという祈りが、終の棲家の板張りに表象されているかのようだ。

高齢化社会の重苦しさを免れない今、私たちは不確かな未来までも包み込んでくれる安心感を希求しているのではないか——鴨川の家を訪れて気づかされた。

(岡部 明子)



母屋 居間
 前面の水田に対して開き、テラスが外部と内部を緩やかに繋ぐ



母屋 サニタリー
 介護士の意見を聞きながら、変化に柔軟に対応するようプランニングにしている